

い な り つ こ

赤 橋 尙 太 郎

三浦半島では初午行事としての稲荷講が殆どなくなつてしまつたが子供の行事として「いなりつこ」又は「いなりこ」と呼ばれるものが僅に残つてゐることが昭和二十九年の初午に横須賀市立工業高等学校生徒が採集した行事中からわかつたので、その時うたう「うた」に重点をおいて本稿をまとめたものである。

三崎の向ヶ崎では「いなりつこ」は二月であるが、普通一月十五日—二十日頃からけいこをやりはじめると云う。「いなりつこ」にうたう歌は次の如くである。

(一) 子供を集める時使う歌

(a) 「やど」の家へ集める場合

○ やどあつまれ、デツサイノウーエ、デツサイノー、オツサイノウーエ

○ やどあんもな、デツサイノウーエ、デツサイノー、オツサイノウーエ

(b) 舞台へ集める場合

○ ぶて集まれ、デツサイノウーエ、デツサイノー、オツサイノウーエ

(二) 子供達が集まつて宿(やど)の家で最初うたう言葉

○ トン／＼たくは誰さんだ、ソレ、いもやの金太さんが手をたく、コチャカマヤセヌ

○ とうふ屋で豆ひく、からをひく、ソレ、おやじがおつころんでびつこひく、コチャカマヤセヌ

○ とつくりさげ／＼どこへ行くの、ソレ、酒買におとつあんにのましてきげんとる、コチャカマヤセヌ

○ はんけちふり／＼どこへ行くの、ソレ、おつかさんにくわしてきげんとる、コチャカマヤセヌ

- お前とならばどこまでも、ソレ、海南のしらたつなみの中までも、コチャカマヤセヌ
- 東京にはやるは巻たばこ、ソレ、品川のにやるは昭和のまきたばこ、コチャカマヤセヌ
- 田中のちよんびり山はすにみて、ソレ、横にみて、たてにみて、うしろはあでんか変の山、コチャカマヤセヌ
- 昔しやろでこぐほではしる、ソレ、今じや便利な機械船、コチャカマヤセヌ
- 機械船の窓から首出してソレ、金太さんの顔が真黒けのけコチャカマヤセヌ
- お寺のお庭のじやくる花ソレ、さげよいさかぬかなしのむじや花コチャカマヤセヌ
- お寺のえんの下で子がなくよソレ、おしよさんよもくぎよたいてだましやんせコチャカマヤセヌ
- 坊さんぼぼけはやみがよいソレ、月夜にやころものおそでがぶらしやらコチャカマヤセヌ
- みかん食いたしげねはなしソレ、きんこぼこあげたらどやされたコチャカマヤセヌ
- せんげん山にはとが鳴くソレ、何となく大松切られて巢がないコチャカマヤセヌ
- お前は武士の子かソレ、武士は武士かかぬかくわれぬくいつぶしコチャカマヤセヌ
- (三) それからおどる着物をきてお面をかぶり太鼓に合せておどる。太鼓はしめ太鼓、大太鼓。お面は「しよつとこ」「とがくし」「はんぎや」「おかめ」「てんぐん」「きつね」「えべつさま」。おどりの種類は「しよつとこ」「ももたるう」「兄弟」「きつね」「えべつさま」
- (四) 二月になると「いなりつこ」の経費をまかなうため部落へ「ゆわし」(「いわわつせ」と言つて各家を廻り金品を集める)にゆく。
- (五) 中学三年生を「大ねぎ」と云い、二年生を「ねぎ」と云う
- (六) 二月十一日になつてその晩は稲荷様のまつつである所へ「ねつてゆく」、そこで「きつね」のおどりをする。それはきつねが油あげを食つて「わな」にかかる迄のことをやるのである。
- (七) ねつてゆく時と、歸りに「けやり」をやる。けやりの言葉
 - 石川五右エ門釜の中 イエ、イエーヨイヤレオー
 - 砂地に小便たまりがない "
 - 畑にはまぐりほつてもない "

(下里清採集)。

ところが北方では行事も極めて簡単である。一例を挙げると葉山町一色あたりでは数軒がグループになつて稲荷社に「さんだわら」に「でつ

く」を入れたものをあげ、鳥居に「かけ魚」をかけ、当番の家に集まって酒をのみ、食を共にするだけで子供の行事はないと云う。「さんだわら」は藁ずと、「でつく」は赤飯、「かけ魚」は赤い魚の同じ大きさのもの二疋を腹合せにして藁をえらから口に通し結んだものである。(三堀泰道採集)。横須賀市八幡や茅山方面もこれと同じだが「かけ魚」のことを「かけのい」又は「かけのえ」と呼んでいる(工藤賢治採集)。初声町では「かけのいお」と呼ぶ(山田国蔵氏談)。葉山町でも堀内では初午の五日位前から子供が夜になると宿(やど)に集る。中学生と小学生である。面をかぶり派手な衣装をつけ太鼓を打ちながら近所の家に「おどらせて下さい」と云つて入りこみ、おどりをやる。その家では幾らかの金をおひねりして投げてやる。初午の日までこれを続ける。初午の朝、岸から千米位離れた名島まで舟を漕ぎ出す。舟中で太鼓をたたき面をかぶつておどる。名島の竜宮様にお詣りして帰つてくる。その夜は大人の宿やまだ歩いていない家をまわつておどるが、この日は早くきりあげて宿にもどり、集まつた金で菓子等を買ひ楽しく過ごす。金が残ると皆で分けるが年かさの者が多くとる。学校で禁じているがまだ行われている(三堀泰道採集)。横須賀市野比字東中村では中学生を大頭、小学五六年生を小頭、三四年生を「いも」と呼ぶ。「いなりこ」の前日には太鼓のばちを削つたり、提灯をさげる竹(三米―三・五米)六本を用意する。当日宮に集り太鼓をたたき、次いで浜に出て太鼓をたたき、それから里中を太鼓をたたきながら廻り、のぼりの立つている家に行つて菓子や茶をごちそうになる。夜は宿で赤飯のにぎり飯、たくあん、こぶなどをごちそうになる。次の朝九時頃宮に集り、手に手になか石を持ち、打ちならしながら「かちかち山の子ぎつねが一びきほえたら皆ほえた」とうたつて宮をまわる(桐生良雄採集)。野比小字下の里では子供はやらない。里人全員は宿に朝十時頃から集まり夜九時頃まで賑かにさわぐ。宿にならない家は此の日一日中「なべかけず」をする。これは此の日かまどに鍋をかけないことで自分の家で煮炊きをしないことである。宿で皆が食う米は里に稲荷田と云う特別の田があつて「いなりこ」に使う米はその田からの収穫によるのである。その田は主に宿になつた家で作ることになつている(太細由治採集)。これは小字大作でも同じである(菊池健一採集)。小字西中村は原中村と似ている。朝早く子供が稲荷社に提灯二つ、赤旗二本、赤飯と油揚げの供物を供えに行く。その後宿に集まつた子供等は手に手に小石二つをうちならしながら「かちかち山のぼらねこが一びきほえたら皆ほえる。火の用心。こう用心」とうたい社をまわる。これを二時間位休み休み続ける。夕方七時頃から里の家を同じ様にはやしながらまわる(太細由治採集)。同じ野比から採集されたのに別な形もある。当日太鼓をたたき「いわつせい、いわつせい、家が繁昌するように、皆が病氣しねえように」とうたいながら棒の先に千代紙で作つた飾(御幣?)をつけたもので人々をはらい清めて歩く(五十嵐勝採集)。

これが四料許北に離れた浦賀では全く別な形をとつている。上町かみちょう稲荷では近所の稲荷と太鼓のたたき合をする。男の稲荷と女の稲荷(狐のこと)をいなりと云つている)にむすびを二つずつ供える。当番の家から、集まつた子供にむすびをくれ、大将に菓子やお金をくれる。大将は子供達の

年かきの者がなるのである。大将は菓子を中学一年生以下の者に分けてやり、金は二・三年生が分ける。この金で買食をするのである。太鼓をたく時「ほうらいつちよ、何でも上町の稲荷が一だよ。もう一つおまけに一だよ。稲荷の段からおつこつて赤ちんぼするむいた、こうやく代をおくれ、くれないうちは動かんど、絵に書いたじいじいよ、紙に書いたばあばあよ。あげておくれ、しんしよやしんしよ」（大庭照之採集）。このうたは浦賀中似たものである。小字ぼら井戸も（堀江勘次採集）田中も同じ（渡辺正利採集）であるが川間では、「ほうら一ちよ、何でもかんでもおいらの関田稲荷は一位だよ。もう一つおまけに十一ちよ、十一ちよ。おいなりさんのおかんけ、ごじゆうにとおあげおあげの段からおつこつて、赤いちんぼをするむいた。こうやく代をおくれ、くれないうちは帰らんぞ、しんしよやく、金倉たてる、立てる、絵に書いたじいじいよ、壁に書いたばあばあよ」（石川武久採集）うたつて家々に物をもらいに歩く。この他小字田中では太鼓をたく時「てこまんでん、てこまんでん、長屋の稲荷に負けるな負けるな」と云う（太細由治採集）。山一つ越えた鴨居では子供が二三日前から稲荷社の傍にむしろで小屋を作り、稲荷講の前夜八時半頃お神楽をあげ、その小屋に泊る。当日は早朝四時半頃から源氏旗（赤青緑紫黄白の紙を長く貼合せたもの）を立て菓子を食つて屋頃まで太鼓をたくだけである（佐久間功採集）。土地の郷土研究家高橋恭一氏は子供の頃（明治末年）稲荷社前で太鼓をたたきながら「いなりこう、万年こう、お稲荷さんのおはつ、おはつの段からおつこつて、赤いちんぼすりむいて、こうやく代をおくれおくれ、一文でも二文でもおかつて次第、しだいの餅は、しぶくて食われない、あんころ餅はいやよ、おぜががいいよ、絵に書いたまらよ、壁に書いたつびよ、ちやんちきどつこい、くしよ」とうたつたが、大正頃にはこのうたの終の方は「絵に書いたぢぢよ、壁に時いたばばよ」になつており、第二次大戦の終頃までやつていたが今はやらなくなつたと云つてゐる。更に山一つ越えた走水では稲荷社をむしろで囲み、その中に泊る。その時子供等は稲荷様を持つて家々をまわり金をもらつて歩く。その時「稲荷万年こ、お稲荷様おはつ、ごじゆうにとおまけ、おまけの段からおつこちて、ちんちよやちんちよ、も一つおまけでちんちよ。南の稲荷は金稲荷、ぎん、狐の銀狐、お稲荷様あげめしやちきだど」とうたう（小島一良・岡本光男採集）。横須賀旧市内では全く見られなくなつた様だ。「稲荷講万年講」とうたうのは広くうたわれていた様だが現在では殆ど消えてしまつたらしい。横浜市金沢区方面でも現在はやめてしまつたが大正頃まではうたつていたそうだ。六浦では「いなりこ、万年こ、お稲荷さんのお初、お初の段からおつこつて、油揚げを食いそね、赤いちんこすりむいた……」（長谷川俊光採集）、瀬が崎では「稲荷講万年講お初の段からおつこちて、赤いおちんこすりむいた。膏薬代をおくれ、くれないうちは動かかない。絵に書いた地震、壁に書いた大まら大根ぢぢい」（小林治夫採集）、町屋では「稲荷講万年講、お稲荷さんのお初、お初の段からおつこつて赤いちんぼすりむいた。痛くもかいくもなんともない。膏薬代をおくれ、くれないやいつまでも動かかない」（東山功採集）となつてゐる。鎌倉市坂の下では「いなりつこ、万年こ、おあげの段からおつこつて、赤いちんぼをすりむいた。一銭でも二銭でもくれるまじや動かねえ、絵に書いたじしんだ」（木村進採集）とうたつたと云う。横浜方面でも大正七、八

年頃まではやつたと云う。保土ヶ谷在では「稲荷こ、万年こ、お稲荷さんのお初、お初の段から落ちて、赤いちんこすりむいた。こうやくを買うんだからこうやく代をおくれ」とうたい、金をくれると「大尽、大尽、大尽」とはやし、くれないと「けちんぼう、けちんぼ、びんぼうのけちんぼ」とけちをつけた（黒田昌旻採集）という。又保土が谷では「お稲荷さんのお初、おじゆにとおあげ、あげておくれよこん／＼さんがなくよ」とうたい、金をもらうと「大尽や大尽や、金蔵たてる」とうたい、くれないと「貧乏や貧乏やいもぐら立てる」とうたつた（丹羽好夫採集）と云う。子安では「稲荷講、万年講、お稲荷さんのお初、ごじんつにおあげ、おあげの段からおつこつて、赤いちん／＼すりむいて、こうやく代をおくれ、おおくれ、おくれ、くれないうちは動かんぞ、あげておくれよこん／＼さんがなくよ」（岡村保治採集）とうたい、中村町では男の子が今戸焼の狐を持つて近所の家をまわり「いなりこ、万年こ、おはつの段からおつこつて、赤くお尻をすりむいて、こうやく代をおくれ、おくれ／＼、一文でも二文でもごかつて次第、しだいの餅は、いいとことつて、食うとこねえ、あげておくれよ、こん／＼さんがなくよ、何とつてなくよ、こん／＼てなくよ」とうたい、金をくれると「だいじん／＼」と云い、くれないと「びんぼ／＼」とはやしたてた（矢沼昭喜採集）そだ。

横浜方面から三浦半島の中部頃まで大体同じ様な風習が行われていたことがわかる。大正頃までは各所で盛に行われていた様だが金銭強要の悪習打破と云う風教上から次第に禁止されたものらしく、現存するものは極めて少い様である。三浦半島南部にも同じものが行われていたかどうかはつきりしないが、久里浜——葉山をつなぐ線以南からは「稲荷講万年講」のうたが採集されて来なかつた。初声町ではやらなかつたと山田国蔵老は云つている。三崎町で全く形の異なる稲荷講が現存するのは、三浦半島中部以北と全く異なる稲荷講の形が行われていたからであろう。

手まり唄採集

塚田明治

横須賀市東浦賀町新井の山下ナヲさんから昔の手まり唄を聞いた。山下さんは明治二十年生である。

○ 通りいづちよの真中で、文を一本拾つて、その文の上書は小僧さん女房になるとつて、とんがらしの仲人ついて御殿やはやして、御殿や御殿女中の居りいす居まあす、の下でまりをすんとついたらば、まりはおやどへとびやんす、花はちり／＼ちりやんす、おさんどうの、おさんど